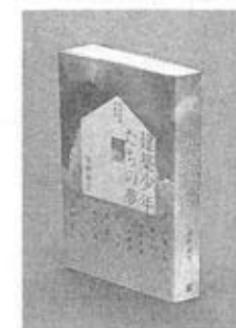


# 建築少年たちの夢

現代建築水滸伝

布野 修司 著

(彰国社・2625円)



ふの・しゅうじ  
1949年生まれ。滋賀  
県立大教授。著書に  
『スラムとウサギ小屋』『住宅戦争』  
『住まいの夢と夢の  
住まい』など。

本書は安藤忠雄や磯崎新を含む九組をとりあげた建築家の列伝である。それぞれの建築家の基本的な思想や作風の変化をコンパクトにまとめた入門書としても読めるだろう。といつても、ただ客観的に人生の履歴を記述したり、作品のデザイン分析を中心とした評伝ではない。アジアの建築・都市研究などで知られる著者が一九六八年に大学に入学し、同世代の仲間たちと知り合い、その後の交友関係にも触れた内容になっているからだ。

各章で紹介される建築家は、共に飲み歩いた同世代か、原広司など学生時代に憧れた上の世代であり、四九年生まれの著者が一番若い。したがって下の世代である SAN AA や隈研吾、アトリエ

例えば、藤森照信を論じるなかで、最初に出会った大学院の授業や互いの家を訪ねたエピソードを振り返っている。つまり、同時代を生きた自撲者の視点から描いた列伝なのだ。またユニークな活動を行つ石山修武、渡辺豊和、象設計集団にも焦点を当てる点は、著者らしさが感じられる。

## 若き日の交流、時代背景描く

一般的にはポストモダントと括られる建築家たちだが、彼らがどのような「建築少年」だったのかを明らかにし、それぞれの原点を描き出している。

・ワンなどはとりあげていい。序章で時代背景を説明しているように、六〇年代のメタボリズムの華々しい建築運動が大阪万博で一段落がつき、オイルショックで不況になつた七〇年代が、著者の思考の原点となつた。それは仕事こそ少ないが、近代建築を乗りこえるべく、多くを語り、深い議論を行い、後に世界的な建築家になつた伊東豊雄や山本理顕らが自身を鍛え、充電していた期間である。活字になつていないう出来事や人間関係から本書で語られる、当時のリアリティーは圧倒的だ。こうした文化を経験していない後の世代にとっては、うらやましい濃密な時間である。

評者 五十嵐 太郎

(東北大教授)